巻　頭　言

毛谷村　英治
立教大学観光学部　学部長

本年度，観光学科は1967年に設置されてから50周年を迎えた．この間，学科は発展的に拡大して学部となり，2006年には観光を取り巻く文化的な事象を扱う交流文化学科を新たに創設し，観光学部は二学科体制となって観光にまつわるあらゆる事象や現象を研究の対象とし教育する，世界的にもユニークな形の観光学部となることができた．それに伴い，研究対象のみならず研究内容も多岐にわたり，関連する他の専門分野に深く入り込む研究が増えてきた．観光研究が他の専門分野の研究としても一定の評価を得て認められるためには，観光研究者が研究上関係する各専門分野のディシプリンを身につけておくことが必要である．

異なるディシプリンの中で育った研究者が集まる観光学部においては，研究者同士が議論する際に使用する専門用語が異なることから，何をどのような観点から議論しているのかを機敏に判断するために，互いに異なるディシプリンを持つことを十分に理解し合った上で取り組まなければならない．そうでなければ，すれ違いの議論や対立する議論になってしまい，領域横断的な観光学としての新たな研究成果を生み出すことが難しくなってしまう．

立教大学観光学部が，このような状況下でも一定の役割を果たせているのは，各領域の研究者が互いを認め合い，異なる領域との境界領域に新たな発見が潜んでいることを期待し，信じて研究に取り組んでいるからであろう．

学科創設50周年の節目の年度を最後に御勇退なさる村上和夫先生は，まさにこの境界領域を実に愉しそうに開拓し，歩んでこられた研究者でした．あたかも煙に巻くように各人の常識を超越したレベルで構想をご披露くださり，雲を掴むようなテーマで研究プロジェクトを御提案され，着実に実行し，魅力的で興味深い成果を上げてこられました．その人望たるや凄まじく，海外からも村上先生のお考えに共鳴して多くの優秀な研究者が集まって来られました．その文学的で聴く者を酔わせるような語り口は，日本語のみならず英語でも遺憾無く発揮され，紀行文学という高尚な分野に留まらず，大衆文化として扱われてしまいそうな「みやげ話」の分析まで精力的に取り組んでおられました．日常の中で個人が見い出す「たのしみ（=Amusement）」の研究にも邁進され，立教大学アミューズメントリサーチセンターをリーダーとして率い，この分野の研究の発展に寄与され，観光研究の未踏分野へのブレークスルーは村上先生が成し遂げられたと言っても過言ではありません．

後進の育成にも熱心で，秋田を中心とした日本の山間部や新座キャンパスが立地する埼玉県の観光資源や観光開発のあり方についても研究と指導に尽くしてこられました．まさに，現在の立教大学観光学部を体現する先生です．

村上先生が御退職されると，今後しばらくは，ユニークな観光研究に取り組まれる個性的な先生は出て来られないかも知れません．村上先生の立教大学観光学部における役割は，そのキャラクターとともに代替の利かない貴重なものでした．現在の立教大学観光学部の教員を代表し，村上和夫先生に心より感謝申し上げます．ありがとうございました．